

南印ポディヤ山、観音信仰発祥の聖地

彦 坂 周

補陀洛 (Potalaka) 山は観音菩薩の住处として古来より伝えられてきたが、その山がインドのどこであるかについては異説があり、未だ定説は確立されていない。それは従来の諸説の典拠が、主に華嚴經入法界品と玄奘の大唐西域記の記述にのみ依っていることにも関係があると思われる。そこで今回は従来の諸説をふまえ、新たにタミル文献と実地調査に基づき観音信仰発祥の地について検討してみたい。

まず新華嚴經第六十八には、「此の南方に山あり、補陀洛迦と名づく。彼に菩薩あり、観自在と名づく、(中略)漸次遊行して彼の山に至り、処々に此の大菩薩を求覓む。其の西面巖谷の中を見るに泉流榮映し、樹林蓊鬱し、香草柔軟にして右施して地に布く。観自在菩薩は金剛宝石上に結跏趺坐し、無量の菩薩は皆宝石に坐して恭敬圍繞す。云々」とある。今、新旧両華嚴經を比較して異なる点は、旧華嚴經では山名を光明山としている点、新華嚴經にその山は南方海上にあると述べる点を挙げることができよう。

大唐西域記第十秣羅矩吒国の記述には、「国の南浜海に秩刺耶山あり、(中略)秣刺耶山の東に布咀洛迦山あり、山径危険にして巖谷欹傾す。山頂に池あり、その水澄鏡にして大河を流出し、周流して山を繞り、二十匝して南海に入る。池の側に石天宮あり、観自在菩薩往來の遊舎なり。云々」とあり、玄奘のこの所説に依れば、補陀洛山は海島にではなく、南印秣羅矩吒国の秣刺耶山の東にある巖谷欹傾の山であるという。法蔵も探玄記にこの山は南印度の南辺にあるといい、智昇も開元録に摩頼耶国は観音の宮殿補陀洛山に近いと述べている。また近世の諸学者の説を挙げれば、R.F. Johnston は西域記に基づき、南印コモリン岬に近いマラヤ山の東にある巖谷欹傾の丘であるとし、高桑駒吉は秣刺耶山の南、Pāpanāsam より Agastyamalai に至る地点であるとし、Ptolemy のいう Bettigo 山にも比定しうるのであろうと論じている。その他、Arian は Potalaka はインダス河の三角洲 Pātāla を指すものであるとし、Cunningham は Hyderabad であると比定している。

これらの諸説の中、高桑説には注目すべきである。しかし彼の説が実地調査に

基づいたものかどうかについては定かでない。

ところで従来諸学者のあまり重視されなかった点は、前述の華嚴経に「此の南方に」とあるのは、具さには第二十五師の住する善度城の南方を指すが、第四師の国を達里鼻茶といい、それは南インドの Draviḍa 国と考えられ、従って Potalaka 山は Draviḍa 国からさらに南方ということになる。西域記にも布咀洛迦山のある秣羅矩吒国は達羅毗荼国 (Pallavan 王国の Kāñcī) の南方三千里にあると記されている点であり、現在のタミル州に相当する。

すでに R. Caldwell は十九世紀初頭、Ptolemy のいう Bettigo 山が Agastya 山に比定するとし、タミル名を Potikai という述べている。海拔 2072.6m のこの Potikai 山は、Tamil 州 Tirunelveli 郡 Pāpanāsam 村より北西約20kmにあり、Tamil 州と Kerala 州の州境をなすインド西山脈中の一山で、西域記が伝えるように、まさに山径危険にして巖谷欹傾する山である。

山名 Potikai の語義について、まず R. Caldwell は隠れた場所の意と解しているが、この山はタミル側やケララ側の遠方からもよく眺望できるので、この解釈は妥当といえない。また C.D. Maclean はこの山がインド象の棲息地であることから、Poti を象の棲む森の意と解しているが、これら二つは現代語的解釈で古典にはこのような意味の用例はない。タミル古典にはこの山は Potiyil 又は Potiyam の名で出てくる。タミル伝統学者はこれを Potu 一般の、il 場所の意と解しているが、タミル語のリエゾン法則では Potu+il は Potuvil となって、Potiyil とはならない。

筆者は Potiyil の語義を、サンスクリットの bodhi (悟る) とタミル語 il (家・場所) の混淆語であると考え、仏教修行僧、菩薩の住処の意と解釈する。即ち、bodhi+il→Pōti+il→Potiyil という過程を経てタミル語化したものであると考える。Potiyil の語はタミル古典の中では、第一に山名、第二に仏教寺院、第三に寺院一般の意味で用いられている。

さてタミル古典シャンガム文学には、南の Potiyil 山は北の Imayam (Himalaya) 山にも比すべき聖なる山であり、山径は危険を極め、山中には猛獣、山間原住民、悪霊などが棲み、登頂は極めて困難であり、山頂には雲が漂っていると述べられている。今は紙面に制限があり詳述できないが、これらの描写は華嚴経や西域記の記述と酷似している。筆者は昨年と今年この山を訪れ、1989年4月には研究者、道案内人、荷物運搬人等総勢十名で登頂した。Potiyil 山一帯は虎や象の特別保護区で夜は猛獣が出没し、山径も極めて危険であった。

タミル叙事詩 *Cilappatikāram* や *Maṇimekalai* には *Potiyil* 山には *Māmuṇi* (偉大な聖者) が住んでいるといい、仏教徒参詣の聖山とされている。原典には *Māmuṇi* の固有名詞を挙げていないが、それは観音菩薩と考えられる。十世紀頃仏教徒の書いたタミル文法書には、タミル語は最初観音菩薩が *Agastya* 仙人に教え、そして世に広まったとされている。これは十世紀頃を境にこの山が観音信仰から *Agastya* 信仰に移行していったことを物語っている。因に十二世紀頃書かれた *Cilappatikāram* の註釈書には *Māmuṇi* は *Agastya* 仙人とされている。

Potiyil 山は火山によってできた岩山であり、山頂は僅か 557m² の広さで、一面が岩盤でそこには池も石天宮もない。しかし中腹の泉を源に *Tāmrarparṇi* 川が流れ出し、雨期にはかなりの水量となって山を数回周り、*Bengal* 湾にそそいでいる。筆者は今回の調査で、その昔修行僧が起臥したであろう天然の巖窟を訪れた。土地の古老はこれを *Paratēci-kukai* と呼び、タミル語で外来僧の巖窟を意味し、彼らを *lāta-cāmi* といい、馬の蹄の如き靴を履いた、又は北インド・ラータ国から来た僧を意味する。窟の中は15人程起臥できる広さで、入口には八段の階段があり、正面右岩面に15の幾可学的模様の文字が刻まれている。また窟の前の大きな岩には数個の円形蓮華模様も刻まれている。

ところで、*Potiyil* 山に源を発する川の名を *Tāmrarparṇi* というが、これはアショカ王碑文にいう古代セイロンの名 *Tāmbapaṇṇi* を指す。このことは古来多数のセイロン僧がこの山に参詣に訪れていたことに由来すると考えられる。興味深いことに *Potiyil* 山の中腹にある広場の名を *Caṅkamuttirai* といい、登山巡礼者の休憩地とされている。この名称からアショカ王の娘でセイロンに仏教を伝えた *Samghamitta* の名を想起する。また今回、*Potiyil* 山から程遠くない *Tērūr* 村の廃寺で観音菩薩の石像を発見した。この村名は古くは *Tēranūr* といい、それはセイロン上座部を指し、その昔多くのセイロン僧がこの村に居たことを伝えている。これらのことは *Potiyil* 山の観音信仰がセイロン仏教徒によっても篤信されていたことを物語るものである。

最後に山名 *Potiyil* と *Potalaka* の関係について一言すれば、南印の聖山 *Potiyil* の高名は華嚴經編纂者にも伝わり、その場合タミル名 *Potiyil* は意識されて *Bodhi+loka* 或は *Buddha+loka* の *Prākṛit* 形で *Potalaka* となって北インドに伝わったのではないかと考える。

〈キーワード〉 観音信仰、補陀洛山、華嚴經、西域記、ポディヤ山

(アジア文化研究所所長、仏教学科主任教授)